

【論文】

100 年前の地方都市におけるコミュニケーション環境

- 秋田土崎港町とその住民にみる -

Communication environment in a provincial city 100 years ago
- Seen in the port city Tsuchizaki Akita and its dwellers -

天雲成津子
TENKUMO, Setsuko

キーワード：情報空間；今野賢三；近江谷栄次；大正期；秋田県；『種蒔く人』

Received: 2010.8.31 Accepted: 2010.10.19

はじめに

この三十年近くの間、インターネットや携帯電話といった新しい情報手段が登場し、広がっていった。その過程では、情報インフラ整備での地域格差、職場・家庭など整備条件の違いからくる設備格差、ノウハウ取得に求められる教育機会などからの個人格差が生じていた。新しい情報手段が登場し受け入れられ、日常の情報ツールとして使用される過程で、送る側、受ける側の事情によっては、受けとった内容に違いが生じてしまう。発信受信双方の情報環境を整えることなしに、正しい情報伝達は成立しえないことを、我々は実際に体験してきたのである。情報環境や情報リテラシーの問題とあいまって、状況次第では受け手に届かなかったり、異なった情報だったりとなかなか様々な混乱をもたらしたのであった。

コミュニケーションは情報の送信と受信の双方があって成立するものである。しかし、従来行われてきた都市空間やコミュニケーション環境、情報との関わりなどについての研究の対象は、大都市圏を対象に分析されることが多かった。地方のメディア受容研究の本格化はまだこれからという段階ではないかと考えている¹⁾。

本稿では、大正期の地方都市におけるパーソナル・レベルでのコミュニケーション環境に注目する。労働者運動と文学運動に新しい可能性を示したとされる雑誌『種蒔く人』、その同人達の多くは秋田市土崎（当時は南秋田郡土崎港町）出身者である。この地では彼らを生前から顕彰してきており、その活動があった関係から同人達の資料がまとまって集められてきた²⁾。これら関係資料を活用して、地方都市の住民の情報環境、次に個人レベルでの情報環境と行動について検証をしてみたい。受信者が発信者の情報をどう受け止めたか、情報を受けた側の状況、情報がさまざまな思想や行動へどうつながっていったかについても視野に入れて考察する。マスではない、ローカル・レベルな環境、さらにそのパーソナ

ル・レベルにも目を向けたコミュニケーション分析を試みたい。

1. 土崎港町のメディア環境

明治に生まれ、日本海に面した地方の港町(大正10年当時の戸数約3,000戸、人口約17,000人程度)に青春時代を過ごしていた人物達が、情報をどのように受け取り、どのように考えていったのか、残した資料をもとにコミュニケーションの実態と地方の情報環境を照らし合わせ、事例検証を積み重ねていく。ここでは、現段階で解り得た事を並べることを主にし、今後さらなる検証を継続していくこととしたい。[末尾年表参照]

1.1. 日本海と雄(御)物川の水上交易と住民気質

土崎の歴史には海運が深く根付いている。日本最古の海洋法規集である室町時代の書、『廻船式目』にもあげられ、中世は北海道から日本海岸の交易を行う安東氏の居城があった、古くからの湊町である。秋田県の北に米代川、中央に雄物川、南に子吉川と3本の川が日本海に注ぐ。土崎は雄物川の河口に位置した海と川の水路が交錯する場であり、おもな(=御物)という名が表すように、この川は藩の米を運ぶルートとして使われていた。雄物川流域農村の米などの農産物が、各船場から蔵宿の手を経て川下げされ、土崎湊に集められた。戻りには土崎から、衣料や日用品の紙類それに塩や海産物などが、川上げされた。北前船がくるのは、春から夏の終わりにかけてである。それまで、江戸時代に新しく加わった町名の穀保町、御蔵町という名が示すように、土崎湊にある御蔵に保管されていた³⁾。佐竹藩の経済が集積する要所として位置づけられていたのである。

コミュニケーションなしで商売は成立しない。大阪・京都の船場衆、北前船の船頭たちとのやりとりは、土崎湊の人々によって行われていたことになる。北前船の経済活動はその情報収集によって裏付けられている。彼らと接する機会が多かった湊の人達も同様である。住民の名字に日本海側の地名が多いこと、寺社仏閣の多様なことから、遠来の住民も多くいたと思われる。新しいことへの親しみと関心、コミュニケーション能力や意欲が育まれていった都市空間、住民文化が形成されていたといえよう。

1.2. 地方都市空間と情報環境

明治4(1871)年廃藩置県が行われ、明治5(1872)年、家督承認制の保護政策は廃止となった。商いは自由競争の時代へと変わり、近代の土崎の活気あふれた最初の時である。この時期に郵便局、銀行など近代的体制が整えられている。経済のしくみは、港内の競争だけでなく、地区間の競争、国家間の競争という資本主義社会の競争原理で動くこととなった。土崎の経済は交易からくる商業中心であり、町の繁栄は港と密接に繋がっていた。明治22(1889)年、明治の町制施行時に町名を土崎港町とする⁴⁾。

シベリアなど国外との商業活動を見据えた近代港となるには、洋船の停泊に適した港の環境整備が必須であった。土崎港の水深が不足とされ、県議会では男鹿半島の船川港を海の正面玄関とする案が浮上した。船川港を推進する議員は『秋田日日新聞』(後に秋田時事)

を運営しており、それに対抗して土崎出身の県議員らが土崎築港整備促進を目的に創刊したのが『秋田毎日』である。土崎は、人口に比べ新聞の発行が県内で飛び抜けて高かった⁵⁾。その間、明治 35(1902)年に開通した鉄道網が拡がり、交通手段の中心は水路から陸路へと移っていった。明治 41(1908)年に、土崎港町が秋田市と誘致合戦をして鉄工場を設置したのは、時代変化にあわせた対応策といえる。土崎は港交易という商業中心から工場を加えた新しい産業基盤を形成しようとしたのである。

1.3. 郵便と電信、交通

以下の表では、県内の郵便局管轄を見てみる。土崎の郵便局は 2 か所あった。参考までに土崎人口推移もあげる。

表 1 郵便局の担当平均面積〔昭和 10(1935)年〕

	全国平均	秋田県 200 局	土崎港町 2 局
郵便局担当面積	34.06 方 粍 ^{ヘイゴウキョウメートル}	58.32 方 粍 ^{ヘイゴウキョウメートル}	2.0762 方 粍 ^{ヘイゴウキョウメートル}
一局の対象人口	6,165 人	5,190 人	9,577 人 (昭和 8 年)
電信の担当面積	46.57 方 粍 ^{ヘイゴウキョウメートル}	77.24 方 粍 ^{ヘイゴウキョウメートル}	2.587 方 粍 ^{ヘイゴウキョウメートル} (昭和13年)
電信発信数 (10 人当)	9.12 通	6.09 通	不 明

出典:『秋田県史』

表 2 土崎港町の戸数、人口推移

年	戸数	人口	面積
明治21(1888)年	1,584戸	9,800人	
明治32(1899)年	(合併前の相染新田村) 395戸	2,245人	
明治40(1907)年	2,416戸	14,837人	
明治44(1911)年	2,722戸	17,170人	
大正12(1923)年	2,931戸	17,721人	0.26方里 (4.152 方 粍 ^{ヘイゴウキョウメートル})
昭和 8(1933)年	3,416戸	19,154人	
昭和13(1938)年	3,393戸	19,291人	0.324方里 (5.174 方 粍 ^{ヘイゴウキョウメートル})

出典:『土崎港町史』

限られた郵便取扱量データなので昭和 10(1935)年の数値となるが、秋田県内の郵便局は 200、集配面積は広いが対象人口が少なく不便な環境であった。表中にはないが、『秋田県史』⁶⁾によると昭和 10 年の県内通常郵便引受は 3,753 万通と大正元年の 1,629 万通の 2.3 倍と増加していた。

以下の表は、秋田県と秋田市の通常郵便の取扱数である⁷⁾。ここで着目したいのは秋田県と秋田市の違いである。引受量に比べ配達（流入通信）が多い秋田県と異なり、秋田市は逆転している。ここでの秋田市の数字は当時別の行政地区であった土崎も含んでいるので誤差はあるかもしれないが、地区への配達より発送が多い。

発信が少ないという意味は何を指すのか。商工業の遅れを示しているとも、県民気質によく指摘される保守性の現れによるものともとれる。県内電話局の担当面積は、1局あたり93.31^{ヘクタール}方^{ヘクタール}で人口8,302人の地域を担当している。加入者合計6,256人で、千人につき6人強、全国平均の二分の一以下であった。この値からみると秋田県内の郵便事情が不便であることがわかる。しかし土崎港町はわずか約4^{ヘクタール}方^{ヘクタール}の町面積の中に、明治の早い段階で郵便・電信電話が用意されている。全国平均を上回った郵便局の設置環境であった。土崎港町の住民達は、全国平均を下回っていた秋田県内の他地区に比べ遙かに便利な通信環境であったことになる。

表 3 秋田県の通常郵便

	引受 (通)	配達 (通)	一世帯あたり 引受(通)	一世帯あたり 配達(通)
明治 36(1903)年	10,391,406	12,611,089	81.5	98.73
明治 41(1908)年	14,303,583	16,827,265	110.1	129.6
大正元(1912)年	16,293,000	18,906,000	121.4	140.9

表 4 秋田市(土崎港町含)の郵便

	引受 (通)	配達 (通)	電信発信 (通)	電信受信 (通)	中継 (通)	電話加入者 (人)
大正元(1912)年	3,734,622	2,213,640	57,123	63,275	未	467
大正 8(1919)年	8,287,756	5,440,068	116,635	130,916	889,136	628
大正 11(1922)年	10,417,424	6,085,066	114,685	129,200	889,763	709

大正期の土崎の交通機関は、水上輸送はまだ健在であったが、その主力は鉄道に移っていた。人の移動も秋田 - 土崎間の馬車鉄道や鉄道が走り、乗合自動車も登場していた。明治から大正にかけて鉄道で東京に向かう場合は、秋田から角館経由か生保内経由で仙岩峠に下車して盛岡までは徒歩、再び盛岡から鉄道で上野に向かう行程で二日以上を要した。大正 12 年に乗換なしで行けるようにはなったが、東京までは 22 時間を要していた。当時、一般的な中央との往来、手紙や雑誌を手にするには二日がかかりであった。

1.4. 米騒動時の報道

この町の当時の有力者達の情報感度の高さ、自主性を表す例がある。大正 7(1918)年 8 月 3 日に富山県西水橋町(現富山市)で発生した米騒動は全国に拡大、軍隊の出動までみられたもあり、14 日に報道禁止へと進んだ。情報と民衆行動という点で注目される事件である。秋田県でも米価の急騰、投機的買占めによる米不足で外米も不足し、不穏な状況であった。(県は 7 月 22 日に、所持米の売り惜しみ防止の告諭を出している)有力者からの寄付金を元にした米の廉売をした結果、大きな騒動に至らなかったという説がある⁸⁾。

明治 23(1890)年にも米価の急激な上昇から騒動になりかけた時、土崎港町では有力者達の資金提供による外米の廉売を実施していた。明治 31(1898)年の米価高騰の折りには『種

蒔く人』のリーダー小牧近江の父、近江谷栄次が個人でラングーンから外米を輸入し、外米の提供をしている。対処法は過去に経験があった。手筈の迅速さと決断が問われていたといえよう。

富山県でおこった米騒動⁹⁾が『秋田魁新報』に報じられるのは8月9日、各地に拡大した（京都では軍隊出動、神戸では商店襲撃）報道は8月13日である。外米で廉売を計画しても買占められているとの報道が8月14日に掲載されている。以下、順を追うと次のようになる。

- 13 日 土崎では野口家の寄付。米価廉売用に資金寄付の申し出があり、町役場で協議会が開催された。（15 日『秋田魁新報』報道）
- 15 日 市は米穀廉売協議会を発足して廉売計画。（外米 1 銭引、内米 3 銭引）
（15 日『秋田魁新報』報道）
- 16 日 県知事談；富豪の寄付により外米で対応。御下賜金あり、細民へ秋田市には 2,300 ~ 2,400 円配当。土崎港、湯沢、横手本荘の寄附を報告し、能代・秋田でも相談中。
（16 日『秋田魁新報』報道）
- 21 日 秋田市富豪の寄付 12,750 円。（22 日『秋田魁新報』報道）
- 25 日 新屋の廉売に寄付。（25 日『秋田魁新報』報道）

土崎の富豪、野口家から廉売のための差額を寄付するとの申し出があり、土崎では他の有力者からの寄付が続いた。その報道から他地区の有力者たちがそれに続き、行政は日雇いなどの給与生活者達に米が入手できるように動いた。土崎では寄付金を元に 5 百戸に 1 戸 1 日 3 升を廉売していた¹⁰⁾。

9 月下旬には米価の上昇は鈍化し事態は収束に向かう。野口銀平は日露戦争から昭和 8 年まで兵庫にも会社を置く野口汽船会社を運営していた。米騒動が激化した神戸からの情報を得ていたのかは定かではないが、彼の迅速な措置が騒動の波及を防ぐ分水嶺であった可能性は高い。

2. 地方人のくらし

明治政府が、文明開化という時代の要請による社会体制整備を遂行した結果として、日本の情報や物流は大きな変革と飛躍を遂げた。その結果、マス・メディアの登場とマス・コミュニケーションが発達したのである。広い範囲の住民に同時に情報が届けられることから、大量の共通認識を得ることが可能となった。政治経済だけではない大衆化社会、都市文化の出現などの暮らしや文化に情報が行き渡る上で、メディアが果たした役割は大きい。

一方、地方の人々の意識、関心は東京を頂点とした都市生活へ注がれていく。地方都市は、周辺の農村の中継点となり、以前より格段に広がった空間、時間の感覚をもった東京の前哨的な空間となった。日本の首都東京を仰ぎ見る地方という階層意識が形成されていたともいえよう。ヴィリリオのいうように、隔たりこそが、それぞれの地域に固有の時

間・空間・文化を生み、多様性をもたらしたのであり、情報によって結ばれ、新しい無数の共存空間がうまれることが可能となったのである¹¹⁾。知覚し得る空間の範囲が拡大し、隔たりが取り除かれ、都市からの文化が地方へ押し寄せた時、地方の現実には労働人口の半分以上がすむ農村の暮らしにあり、地方都市の文化生活はその中間に位置していた。

2.1. 『種蒔く人』同人の今野賢三

今野賢三は明治 26(1893)年に裕福とはいえない家庭に生まれた。生まれてすぐ父親は戦争に行き死亡し、母は港に訪れる人たちの宿屋をしていたが鉄道の開通で利用は激減、生活は苦しかった¹²⁾。土崎小学校高等科を卒業した後、16 歳で秋田の呉服屋に丁稚として勤めるが店がつぶれる。20 歳に上京し郵便集配人をしながら、22 歳に活動弁士となり、東京の映画館に勤めた後、秋田や能代、土崎で弁士として勤める間に大正 10 年『種蒔く人』へ刊行から最後まで関わり、後に編集長を務めた。関東大震災時の朝鮮人虐殺を伝える『種蒔く人』号外は彼による。『文芸戦線』にも参加したが、秋田に戻って労農運動に関わり、刑務所に入れられている。戦後は、秋田の郷土史作家としての著作がある。

2.2. 日記

今野賢三が残した記録の中にある 5 冊のノートには、大正 9 年 10 月 30 日から翌年 11 月 28 日までの記録(ただし、4 月から 11 月の間は切り取られて不明)が記されており、この日記を佐々木久春氏が『花塵録』として再録している。ここではこの資料の大正 9 年 11 月から翌年 3 月までの 5 ヶ月の記録をもとにして、彼の行動を分析した。

彼の日記は最初の 2 ヶ月はほぼ毎日といっていいペースで書かれている。その日その日の印象に残った出来事を書き留めた日記には、人に見られることを想定しなかったであろう内容が相当あり、書く段階での作為はなかったことが窺われる。

当時の今野は小川洛陽という名で活動弁士をしていた。登場人物のセリフを巧みに入れて自分のセンスで作品の説明、解説を構成して映像世界を案内する弁士は、人気や収入があった半面、水商売に近い人気職業とみられていた。映画解説には知識も必要で今野は洋画が得意であったという。弁士は人気商売であり水商売との交友、花柳界の芸者衆との交友が盛んであった。熱烈な小説家志望であった今野だがこの日記には恋愛相手のことが始終記されている。その華やかな暮らしの中で、芸術との相克に悩んだり、地元新聞への投稿や、有島武郎に積極的な手紙を出して師弟関係を結ぶなど多忙な日々であった。

この日記は『種蒔く人』の発行と前後する秋田での日々を綴ったものである。最後の秋田を離れ東京へ向かう件は、『種蒔く人』同人たちと合流するための上京であった。

2.3. 日記からみる行動

彼の日記に基づき、大正 9 年 11 月から 10 年 3 月までの行動を以下の表に月ごとにまとめた。(この表以外に細かい記述は省略、〔場〕の欄に記した距離は概算である)

この間の日記はひたすら恋愛感情と文学で生きることへの熱望を綴っている。この時点では『秋田魁新報』の編集に自作の売り込みをして失敗、彼らの上司に交渉しようか、他の新聞に売り込もうかと思いつめていた。自分の思いが赤裸々に書かれている文面からは、

『種蒔く人』同人である金子洋文を兄のように追いかけて、信頼し無条件に受け入れていたことがわかる。後にプロレタリア運動に向かう動機は、金子の思想というよりも、金子という人間への憧憬がもたらしたのではないかと思われるほどであった。病の母を置いて上京することを悩み、数々の煩悩をもっていたが、反面、人には理想の人生を説き、己の行動と主張の矛盾を疑問視することもしていない。この頃は、今野の思想が変化する前の段階であり、単なる一地方の文学青年の行動記録ともいえよう。

表 5 今野賢三の日記から

年月		場	読書	郵便	
	記載数	移動先と日数；距離	読みもの	手紙受	手紙書
大正 9 年 11 月	29 日	船川 2 日；32 ㎞ 秋田 4 日；7 ㎞	雑誌『中央文学』／車中 (トルストイ?)「復活」／3 日	9 通	14 通
大正 9 年 12 月	31 日	秋田 1 日；7 ㎞	雑誌『少女画報』／みせる お伽噺「不思議な冒険」／みせる 上司小剣「微笑」 志賀直哉「暗夜行路」 ¹³⁾	9 通	14 通
大正 10 年 1 月	16 日	秋田 4 日；7 ㎞	ドストエフスキー「白痴」	1 通	1 通
大正 10 年 2 月	17 日	(一日市；約 22 ㎞) 能代 2 日；53 ㎞	武者小路実篤「その妹」／みせる 雑誌『中央文学』「ロマンロ オランの印象」／車中	4 通	1 通
大正 10 年 3 月	18 日	大川 1 日；22 ㎞ 秋田 3 日；7 ㎞	雑誌『新潮』「作家論」 チェーホフ集／受取	3 通	3 通

2.3.1. 読書について

読書は個人的な行為であるが、その内容と読まれ方が少しずつ異なっている。移動する汽車の車中では雑誌を読む事が多い。今回はこれを『／車中』と記しておいた。雑誌『中央文学』は大正 6 年 4 月から 10 年 12 月まで春陽堂が発刊した雑誌で、田山花袋、上司小剣などの執筆があり、10 年 2 月の雑誌には小牧近江の文が掲載されていた¹⁴⁾。

「／みせる」と記したのは、芸者に本を渡したり読んであげたりしている事を示している。土崎の芸者たちのうちで読書好きな者たちでつくった「ダリヤ会」というグループがあった。彼女たちが翌年のロシア饑饉救済を目的とした『種蒔く人』後援会の募金で大活躍したという後日談がある。賢三は芸者として働く彼女達との交流に本を有効に活用していた。

ところで彼は本をどうやって入手したのだろうか。意中の女性にお伽噺をみせるために、友人に本を借りにいったこと、頻繁に太陽堂という書店にいったと書かれていることから、購入するだけでなく、融通しあっていたのではないかと推測される。この日記にはないが、彼が書いた記事の中に、土崎図書館に自分が読みたい本を融通してもらおうべく薦めて用意してもらったと記している。

2.3.2. 交友について

弁士という人気商売柄、他人より多い収入を得ているが外食、料亭に日参する派手な暮

らしである。内実は服を質入れしてのやりくり、料亭の代金や食事代を借金、つけ払いをしていた。彼の活動時間は都会型で、起床は昼頃、就寝は深夜に及ぶことも多い。芸者衆や遊び人など限られた層との交流が中心になることも、これが一因かと思われる。日記に名前が登場する人たちは、当時の土崎や秋田の報道・印刷関係者が多い。狭い範囲の地域では、知識階層の人数は少なくその動行も把握しやすかったのではないだろうか。

また、交通機関を使つての移動も多い。秋田へは週一度位の頻度で、馬車と鉄道（乗合自動車特別に一度だけ）で足を運んでいる。他地区への移動手段は汽車で、男鹿や能代へは日帰りをしていない。

このような秋田県土崎にあって都市生活を満喫しているように見える今野だが、小説家を目指す野心をもっており、それゆえの相克があった。

2.3.3. 手紙について

手紙についての記述で注目したいのは、『種蒔く人』発行と重なる2月をのぞき、受信より発信の方が多くことである。先に記した秋田県の郵便利用の傾向と異なっていた。彼には伝えたいこと、伝えるべき事が多かったのであろう。金子の手紙が到着した時は即日返事を書こうとしている。重要な急ぎと認識していたのだろうが、他の友人からの手紙には一日二日の間がある所は興味深い。

また、一人で書くことには心許ないということか、それとも単に一緒に書いたという意味での寄せ書きなのか不明だが、金子洋文と交際の芸者との手紙のやりとりの際には一緒に読んだり寄せ書きを書いたりした記述が幾度もある。明治40年代における女子の小学校進学率は9割を超えているのだが、卒業後の読み書き能力には問題が残っていたということかもしれない。手紙はその言葉遣いだけでなく、紙、筆使いなどで重要な印象をもたらす。不慣れな者には負担が大きかった。芸者達には土崎周辺の農村から来る娘も多かった。当時の地方農村、特に女性の場合は、読む物も時間も不足しており、まして、書き物をする機会も道具もまず無い環境下であった。読み書きの能力を形成することは簡単ではなかったと推察される。町に住む娘との違いが現れた時代であった。

3. 地方から都会、世界への視点

小牧の父、近江谷栄次は明治7(1874)年、一日市（現；秋田県南秋田郡八郎潟町）の畠山源之丞の七男として生まれる。11人兄弟の7番目であった。優秀な男子が多いことからこの家の息子達は、県内のさまざまな素封家へ養子に行くことになる。栄次も秋田中学卒業後16歳で秋田市土崎港の豪商近江谷栄治の養子となり襲名、後に栄次となる。国会議員時代にはブリュッセルで開催の第16回万国議員会議に参加した最初の日本議員のメンバーに入っている。渡欧の際に17歳の長男小牧近江（本名：近江谷駒^{こま}）を同行、パリのアンリ4世校へ入学させている。日本からの学費送金が滞ったため小牧は退学となったが、働きながらパリ大学を卒業する。平和運動クラルテの思想を携えて帰国し、外務省に勤めながら『種蒔く人』を創刊することとなった。

栄次はロシアとの経済交流を見据えて八郎潟をも含めた広大な港の構想を発表している。地方農村の生活から、家業で外国と商いを行い、国政に参加してヨーロッパの政治を見る機会をもっていた栄次によって、小牧は日本だけではなく世界全体を見る機会を得たのである。

3.1. 近江谷栄次

若くして土崎港町のリーダーとして頭角をあらわし、秋田銀行、信用組合の創立、土崎港の築港、電気、石油、鉱山の開発に尽力した。県会議員、代議士、町長となり、町のために尽くし、その多大な経済貢献の結果、家財を傾けた人である。近江谷一族や生家の畠山家から多くの子供達を預かって東京の学校に通わせている。このなかには後に『種蒔く人』に参加する者もいた。

雑誌『第三帝国』は、官僚政治打破の論陣を張りつつ、小日本主義を主張した『万朝報』の記者であった茅原華山が論をはり、大正デモクラシー期に一世を風靡した社会評論誌である。この雑誌の発行編集者の石田友治は土崎出身者であり、後に『種蒔く人』同人の金子洋文もこの雑誌と関係している。その創刊号には、尾崎行雄、犬養毅らと並んで井堂之人という名で栄次の「先ず財閥を打破すべし」が並んでいる。

中央との人脈をもち、黒竜会設立に関わり、頭山満、内田良平らと親交があった。伊藤博文を暗殺した安重根とも交流があった人で、韓国併合に賛成したことを生涯悔やんでいたという。

3.2. 親族雑誌のコミュニケーション

近江谷栄次は、南秋田郡の肝入り¹⁵⁾の農家畠山家から近江谷家に 16 歳で婿入りした。近江谷栄次の生家からは、多くの兄弟達が他家へ婿入りしており、彼ら兄弟の縁で親戚となった者たちで、近江谷家、畠山家を中心に大正 2 年に「さくら会」という会を結成し親睦をはかっている。その一族の絆をこの会のメンバーを中心に配布された会誌で確認することが出来る。会誌作成の歴史は長く、大正 8 年の同人雑誌『櫻』、大正 11 年の『雷魚』があったという。昭和にはいって『さくら』、『自由ヶ丘派』、『上原クラブ』、『翼のごとく』と、誌名を変えながら大正から昭和 50 年代まで刊行されていたことが確認されている¹⁶⁾。発行所は近江谷栄次の住所である。息子達が編集をし、主な会員は親族や一族の親しい人達で、彼らからの会費をもとに発行していた。会員の消息や子供達の文に、それぞれの四方山話や詩、企画行事とその報告や会員へのアンケートなど、身近な記事を集めながら作っている。頁数は 12 頁以上 32 頁の時もあり、プロの装丁デザイナー、印刷所などを介して発行されている。会誌は本格的に印刷・製本され、親族だけでなく知人にむけても配布されていた。

登場する人の名前には、前田河廣一郎や青野季吉など、近江谷家の幅広い人脈が伺えるものとなっている。内容は、留学先のフランス、仕事先のハノイと、世界中に広がった親族らから寄せられた手紙や原稿などからなり、一族の動向を伝えるもの、地元秋田からの話題など、様々なものが掲載されている。有島武郎の家でも家族新聞があったようだが、

親族間の会誌がこの規模で 50 年を超える長期間にわたり続けられていたという事例は、寡聞にして知らない。彼ら一族の結束の背景には、この雑誌も一翼を担っていたのではないかと考えている¹⁷⁾。

4. おわりに

冒頭に述べたように、コミュニケーションは発信と受信があって成立する。そしてコミュニケーションなしで人は生きられない。情報のやりとり、それがどのように受け止められ内面に息づくか、どのような行動に繋がったかは重大な命題である。

ところで、現代のコマーシャリズムの世界では、宣伝情報をどれ位どのように発信したかという検証だけでなく、受信した側がどう受けとめているか、更には、受け手がどう行動したかについて消費行動研究からの見地で分析が盛んになってきている¹⁸⁾。その際、受信側の情報環境がどのような状況であるかが重要なファクターとなっている。同様に今後の情報研究においても新しい展開が予想できる。

情報伝達手段、交通移動手段の進化によって交流可能な範囲が画期的に広がった。その意味において、当時と現代社会は相通じるものがある。地方農村に生まれた近江谷栄次だが、商いをする機会、議員という立場もあり広い人脈をもっていた。彼の構想はシベリアやアジア、ヨーロッパへと広がっていった。渡欧する機会もあった。息子の小牧を始め一族に世界を近づけたともいえる。一方の今野賢三と比較する時、世界を感得する範囲の違いは明らかである。都会と地方の情報格差、さらに同じ地方の住人の中でも格差があることを二人の人物を例に分析を試みた。100 年前の地方都市をみると、情報格差は存在し、メディアが発達する過程でより拡大していったことが明らかになった。

この格差は拡大し、単なる個人レベルではなく地域格差や、国家間の問題につながる可能性もあることが仄見えたようである。名もない人達の生活や意識が織りなす空間と時間、これらを知ることの大切さを痛感しながら、その手段についての検討が今後の課題である。

年表 土崎の情報基盤

	土崎港町 郵便局など	日本の大きな事象
明治 4 (1871)年		廃藩置県・近代郵便制度開始
明治 5 (1872)年	郵便局で郵便取扱を開始	
明治 7 (1874)年	秋田で『遐邇新聞（後の魁新報）』創刊	
明治 9 (1876)年	三菱汽船、土崎・船川に定期航路開設	
明治 13 (1880)年	郵便局で貯金・為替の取扱を開始	
明治 15 (1882)年	雄物川洪水、修繕	
明治 22 (1889)年	土崎港町誕生 / 土崎—秋田間の馬車鉄道開始	帝国憲法発布
明治 23 (1890)年	郵便局で電信取扱、米価高騰で窮民騒動	第 1 回衆議院選挙
明治 27 (1894)年		日清戦争（～1895）
明治 34 (1901)年	近江谷発電所開始、家庭に電灯 209 戸	
明治 35 (1902)年	鉄道開設（奥羽線全開通は明治 38 年） 図書館開館 / 『秋田日日新聞』『土崎商報』創刊	
明治 37 (1904)年		日露戦争（～1905）
明治 40 (1907)年	郵便局で電話交換業務を開始 加入 89 名（秋田局 201 人で開始） / 秋田電気会社 秋田・土崎ほか店灯 1,488 戸	
明治 41 (1908)年	鉄道土崎工場開始	
明治 43 (1910)年	日石秋田製油所操業開始	
明治 44 (1911)年	土崎資本家が出資して『秋田毎日』創刊	
大正 3 (1914)年	『土崎商報』『土崎新報』一般言論誌化	日本、第一次世界大戦に参戦
大正 7 (1918)年		シベリア出征 / 米騒動
大正 8 (1919)年	『南秋時報』（～大正 11 年）	パリ講和会議（1～6 月）
大正 9 (1920)年	雑誌『種蒔く人』創刊	
大正 10 (1921)年	土崎—秋田の軌道鉄道馬車を電車化	
大正 11 (1922)年	秋田—上野間まで鉄道がつながる	ソビエト社会主義共和国成立
大正 12 (1923)年		関東大震災
大正 14 (1925)年		NHK ラジオ本放送開始
昭和 2 (1927)年		金融恐慌
昭和 4 (1929)年	『秋田民衆新聞』創刊（～昭和 15 年）	
昭和 6 (1931)年		満州事変
昭和 8 (1933)年	『新興土崎』創刊（～昭和 15 年）	日本、国際連盟を脱退

註

- 1) アラン・コルバンは『記録を残さなかった男の歴史』(藤原書店、1999年)で、読み書きできない、普通に暮らしていた一人の木靴職人の暮らしを調べ上げ再現した。有山輝雄氏は福島県梁川町における明治大正期のメディアと人々との関わりを検証し『近代日本のメディアと地域社会』(吉川弘文館、2009年)で著している。他にも「下からの歴史研究」として、数々の研究をされている。他にも先行研究が出てきており、地方からみたメディア研究はこれから一段と研究が進む期待をもっている。
- 2) 秋田市立土崎図書館、秋田県立図書館では同人達が存命の頃から資料が保管されている。また、秋田市立土崎図書館では金子洋文、あきた文学資料館には、小牧近江の遺族からの資料が寄せられ、郷土資料と連携しての資料活用が可能である。
- 3) 秋田市役所土崎出張所編『土崎港町史』加賀谷書店、1979年より
- 4) 古くから船が寄港する土崎の呼称は、江戸・明治初期までは「湊」を使用している。近代の港湾設備が整った施設に、「港」は使用されるようになった。土崎港とされたのは明治からのことである。市制・町村制の折、土崎の住民は、「土崎港町」という名を選択したのであった。
- 5) 『秋田県史』によると、大正元年の県内新聞雑誌と年間発売頒布数の報告をもとに刊行頻度で割った頒布規模によれば、当時秋田県内の日刊紙は5誌。『秋田新報』29,000部、『秋田時事』21,100部、『秋田毎日新聞』3,390部となる。残りの日刊紙は、能代の『北羽新報』93部、横手の『羽後新報』335部である。
週刊では『土崎商業新報』3,172部、『土崎商報』416部である。『秋田毎日』は、築港運動のため土崎の議員達が中心になっていたのも、重ねて読む者も多かったと思われる。
- 6) 秋田県編『秋田県史』第六巻大正昭和編 加賀屋書店、1977年、秋田市編『秋田市史』第4巻近現代編 秋田市、2000年
- 7) 秋田県編『秋田県史』第六巻大正昭和編 加賀屋書店、1977年、秋田市編『秋田市史』第4巻近現代編 秋田市、2000年
- 8) 田口勝一郎『近代秋田の地域と民衆』みしま書房、1985年
- 9) 8月9日『高岡新報』が、最初の新聞記事といわれている。
- 10) 新野直吉他編『近代の秋田』秋田魁新報社、1991年
- 11) ポール・ヴィリリオ(Paul Virilio)の一連の著作；『情報エネルギー - 化社会 現実空間の解体と速度が作り出す空間』新評論、2002年、『瞬間の君臨—リアルタイム世界の構造と人間社会の行方』新評論、2003年、『情報化爆弾』産業図書、1999年
- 12) 明治後半から急速に上昇した進学率は初等科は100パーセントに近づきつつあったが、高等小学校への進学は異なっていた。百瀬孝『事典 昭和戦前期の日本 - 制度と実態』(吉川弘文館、1990年)によると、昭和でも10歳以上で高等小学校へ進級しない者が13パーセントいた。
- 13) 「暗夜行路」は雑誌「改造」に連載された後、大正11年に新潮社から本が刊行された。今野が読んだのは、雑誌からと思われる。
- 14) 『中央文学』10年2月号の小牧近江が掲載していた雑誌の誌面については、秋田市立中央図書館明徳館長の北条常久氏よりご教示いただいた。
- 15) 肝入りは、現代の村長、村の代表を意味し、家代々の村代表をつとめるという役であった。畠山家の場合は村の郵便局も担当していた。
- 16) 秋田県立あきた文学資料館所蔵、秋田市立土崎図書館所蔵資料から確認された。
- 17) これらについては、秋田県立あきた文学資料館所蔵、秋田市立土崎図書館所蔵がある。
- 18) 四元正弘(電通総研主任研究員): 2010年7月にお話を伺った際にご教示いただいた。

主たる参考文献

今野賢三著・佐々木久春編『花塵録「種蒔く人」今野賢三青春日記』無明舎出版、1982年
 秋田市編『秋田市史 近代資料編』秋田市、2000年
 秋田県編『秋田県史 第六巻 大正昭和編』加賀屋書店、1977年
 田口勝一郎『近代秋田の地域と民衆』みしま書房、1985年
 新野直吉他編『近代の秋田』秋田魁新報社、1991年
 秋田市役所土崎出張所編『土崎港町史 復刻版』加賀谷書店、1979年
 みなと(土崎)文人展企画同人『近江谷井堂』みなと(土崎)文人展企画同人、2001年